

# 7 県内の取組事例紹介(コラム)

## 「一期一会」 ～ おもてなしの心 仙台商工会議所

日本一のスケールを誇る仙台七夕まつりは今年も多くの人で賑わい、仙台の街は豪華な竹飾りでいっぱいになりました。

私の仕事は、パンフレットや観光地図の配布、道案内が中心でした。私は相手の方に失礼のないように心がけました。もし私たちの服装がだらしなかったり、態度が無愛想だったりしたなら、せっかくなってきたお客様が嫌な思いになったり、仙台の街の印象が悪くなってしまったりしてしまいます。仙台にもう一度行ってみたいと思っていただけるように、私は元気でそして笑顔で、小さな子供から高齢者の方までの様々な方と触れ合いました。

そうする事で、自分自身も普段とは違った角度から仙台を見る事ができ、前よりも自分の住む街に興味を抱くようになりました。

仙台の街、そして仙台七夕がたくさんの人に愛され支えられながら歴史を刻んでいき、これからも様々な分野で発展していく事を期待してまいります。

以上、仙台七夕まつりにボランティアとして協力いただいた高校生の感想です。

仙台七夕まつりには、毎年、県内外から200万人にも上る観光客が訪れるため、市民の方々の他、高校生の皆さんにもボランティアとしてご協力いただいております。

わずか3日間のボランティアではありましたが、最後に書いてもらった感想の中には、貴重な経験や思い、そして私たちが学ぶべきことがたくさん詰まっていました。

このボランティアに参加したのは、「今年は少し違う立場に立ってみるのも面白いかもしれない」と思ったのがきっかけでした。

たくさんの人との触れ合いの中で、私は相手の事を考えて行動する事の大切さを勉強できました。子供に接する時にはきちんと子供の目線に合わせて話す、お年寄りに紹介するお店は、なるべく近くの、あまり歩かないところがいいなど、簡単な事なのですが、とても大切な事だと思えます。

観光客の方の中で、私がとても印象に残っている人がいます。その人は、私にトイレの場所を尋ねてきました。私はそれに答えてあげました。ただそれだけの事だったのですが、その人はわざわざ戻ってきて、「ありがとう。あんた気に入ったからこれやるわ。」と、カエルの木彫りをくれました。ご自分で彫ったものだそうです。この話は去年の話です。私がボランティアに参加するのは今年が2年目なのですが、今年も参加したのは、もしかしたらその人にもう一度会えるかもしれないという思いもあったからでした。その人に会って、一言お礼を言いたかったからでした。ところが、残念ながらその人には会えませんでした。まさに「一期一会」とはこの事だと実感させられました。でも、こんな素敵な体験は、そうは出来る事ではありません。ですから、このボランティアを是非後輩にもしてほしいと思います。



協働による新たな観光資源づくり

宮城県大河原地方振興事務所

仙南の地域資源を魅力あるものとして磨き上げ、仙南地域を訪れる観光客がまた来てみたいと実感できる地域をつくるため、新しい観光資源『みやぎ蔵王三十六景』を平成15年度に創りだしました。みやぎ蔵王三十六景とは、仙南2市7町のそれぞれの場所から風景の中にみやぎ蔵王連峰を望める素晴らしいスポットで、450人の県民の方々から134か所の推薦をいただき、その中から36か所を選定しました。

選定された『みやぎ蔵王三十六景』を普及推進するため、3つの基本理念として「食と観光の連携」、「食と観光の仙南ブランドづくり」、「住民協働」を掲げ、「楽しむ」、「広める」、「そして、「商う」の3本柱を戦略とした展開を図っています。

それぞれの三十六景を地域共有の財産とするため、はじめに取り組んだのは、市町や商工団体、さらには地域の住民の皆さんの協力を得て、仙南の杉間伐材でつくった選定地表示看板を設置し、PRを進めていくことでした。つぎに、シンボルマークを宮城大学生の皆さんとの協働で製作し、その後、三十六景のナビゲートマップを作成し、配布をしました。さらに、人が多く集まる駅など公共施設を利用して、三十六景の写真展を定期的に開催し、選定地のPR活動を行ってきました。

平成17年度からは活動をPWR（パワー）アップし、市町との連携で情報冊子「みやぎ蔵王36（山麓）物語」を作成しました。この情報冊子は、仙南の体験施設、農産物直売所、温泉施設、温泉効能等の情報を紹介したもので、観光案内所等で配布し誘客を図っています。また、四季折々の三十六景を撮影するボランティアアカメラマンも募集し、撮影された写真を青葉通り地下道ギャラリーなどで写真展として発表しました。この活動は更に拡大し、平成18年春にはこの写真展を仙台駅2階コンコースで開催し、同時に市町や観光関係者、地域団体との協働で観光キャンペーンを開催するに至っています。JRとの連携においても、JR商品「駅長オススメの小さな旅」や「駅からハイキング」の素材として企画提案し、三十六景が旅行商品としても販売されました。この三十六景は観光振興だけでなくとどまらず産業面においても活用が図られ、地場産品のゆうパック販売では特産品観光のイメージが相互に期待されるとして、三十六景の写真やシンボルマークが村田町特産そらまめゆうパック申込書に採用されました。これからのみやぎ蔵王三十六景事業は、それぞれの地域を地域の方々から自分たちの誇り・財産としてその魅力を常に発信し、また各関係団体が観光など各産業において活用されるよう、県や市町が「みやぎ蔵王三十六景ブランド創造会議」などをとおして多面的に支援すること、人々に広く「みやぎ蔵王三十六景」が知られるようになり、ひいてはその活動が地域の活性化につながるよう展開してまいります。



## 市民の手で市民の財産を守る

おもてなしの心大改革！  
特定非営利活動法人 不忘アザレア 遠藤 一夫氏

経営していた企業が破綻してしまった「白石スキー場」を、市民の要望を受けて白石市が無償譲渡を受けたのが、平成11年1月のことです。市民から親しまれていたスキー場を観光地として、そして地元財産として残したいという市民の強い思いから「運営は市民の手で」という声が上がります。立ち上がったのが「NPO 法人不忘アザレア」でした。当初は、スキー場の管理運営を目的とするNPOが成り立つのか、索道（リフト）の事業免許をNPOが受けられるのか、等々課題は山積。しかし、会員のそして市民の「白石スキー場」への熱い思いから、一つずつ課題を解決し、平成11年12月にNPOの運営するスキー場がオープンしたのです。

オープン当初から、センターハウス内数箇所にアンケート記入所を設置して、お客様から意見をいただくようにしました。いただいた意見は定期的にまず現場責任者が見て、管理事務所、アルバイトを含める全スタッフに回覧した上で、アザレアの中核である理事会へ持って行く。このシステムで、今までの縦に下りてきていた指示では直せなかった営業課題があつさり解消しました。スタッフのほぼ全員がアザレアの会員です。「自分たちが働く場を市民として残したのだ」という思いで経営そのものに関心を持ち、アザレアの体制を監督する立場にもまわっている訳ですから、おのずと意識も変わります。つまり、お客様の生の声には当然敏感に反応することになります。これは、とても大きな改革でした。

白石スキー場は大変小規模なスキー場です。大規模修繕や施設整備は市が行い、常に協議しながら活動していますが、委託料は一切いただいておりません。それもあって設備投資がほとんどできていないのが現状です。大型スキー場とは違い、大半の業務が手動です。だからこそ、「できない！」ではなく、「それでもできることを！」が大切になります。お客様は支払ったお金に見合うサービスを要求します。NPOだからできないという理論は成立しないのです。さらに、私たちに市民のために市民の力でこのスキー場を残していくという思いもあります。ですから自分たちの思いと市民や利用者の要望を必ずすり合わせて進むようにしてきました。私たちの仕事はスキーシーズンだけではなく、環境を題材とした研究会や学習会、植栽活動、清掃登山など、オフシーズンにも白石蔵王の自然に親しんでもらえる事業を展開しています。同時に、山野草の研究会、清掃登山、星の観察会等、会員のための勉強会も実施し、自分たち自身も常に山を学習しています。



今後は、白石にもたくさんあるNPOやボランティア団体、そして地域の団体や温泉などと連携を図りながら、さまざまなアイデアを取り入れて、団体としてさらに成長し、市民の大切な財産でもある「白石スキー場」を皆に誇れる観光地にしたいと思っています。



## 旅館、商店、地域住民：垣根を越えた地域づくり

東鳴子ゆめ会議 大沼 伸治氏

かつて伊達藩の御用湯である「御殿湯」が置かれていた東鳴子温泉は、その湯の良さで世に知られ、宮城県内を中心に近隣県からも多くの湯治客を集めていました。しかし高度成長後、主たる客層である第一次産業の構造的不況やバブル後の需要不振、客不足の波は東鳴子温泉にも着実に押し寄せようとしていました。当時、漠然とした不安は誰もが持っていました。しかし、なかなか声を上げる人がいまま東鳴子温泉は深刻な状況に陥るうとしていたのです。

そこで、2002年3月、危機感を抱いた旅館青年部が立ち上がり、観光協会や旅館組合の総会の場で地域づくりの必要性を訴えたのです。

現代の湯治場作りを目指す

まず自分たちが楽しめ、誇りを持てるまちづくりをする

明治43年の大洪水で損壊した「御殿湯」の復活を果たす

その時に掲げたのがこの3つの目標でした。

目標を達成するためには、地域一体となって地域づくりに取り組まなければなりません。そこで、住民組織の東鳴子親交会、旅館組合の東鳴子旅館組合、商店など事業主も属する東鳴子観光協会を合体させた「東鳴子ゆめ会議」が発足したのです。

しかし、旅館、商店、そして住民の間にあつた目に見えない垣根を越え、皆が主体となって地域づくりに取り組むことは容易なことではありませんでした。いろいろの人に相談し、事例を学び、そしてさまざまなジャンルで活躍する人々による応援を得て、少しずつ周りを巻き込みながら一歩一歩前に進んできました。

2004年には昭和27年に開業したJR鳴子御殿湯駅が半世紀ぶりに完全リニューアル。地域づくりに

対する追い風が増したと感じた出来事でした。その後、アートや音楽などと「湯治」を組み合わせた「GOTEM GOTEM」2005～2006アート湯治祭」をはじめとし、

新たな事業を計画、実施してきました。イベントが話題を呼び、人を呼び、さらに人が人を連れてくる、そんな人と人の交流によって「東鳴子ゆめ会議」は支えられてきたのです。

「東鳴子ゆめ会議」は、やっと走り始めたばかりです。これからは、さらに地域の一体化を推進し、他の温泉地や地域との連携を深め、そして中長期的目標でもある御殿湯復活を実現させたいと考えています。



## 「イエローアイランド」を目指して ― 資源循環の取組み

特定非営利活動法人 大島大好き 白幡 昇一氏

大島では現在、観光客入込み数の減少を食い止め、交流人口を拡大するための策の一つとして「海型体験の地」を目指して体験学習の受け入れを積極的に進めています。平成11年4月から「大島体験予約センター」を立ち上げ、受け入れ体制の整備、プレゼンを実施してきた結果、今では北海道から南は関東まで数多くの小・中・高校の修学旅行を受け入れ、平成18年度は34校、約400人の子供たちが島を訪れました。

大島には「島の体験館」という施設がないため、島の自然、海の生業が体験学習の重要なフィールドになります。そこで島の財産でもある環境を守っていくため、島という閉鎖的空間の中で資源を循環できる仕組みができないものかと考えたのが「菜の花プロジェクト」の始まりでした。島を菜の花でいっぱいにし、菜種油を採取、それを食用油とし、使用後の廃油を再処理して燃料とする。そんな仕組みを考えました。



そしてそのプロジェクトを実施するために立ち上げたのが、NPO法人「大島大好き」でした。平成17年4月、会員わずか20人からのスタートでした。しかし、同年6月には廃食用油の回収、9月には菜の花の播種、12月にはBDP(軽油代替燃料)プラント導入、精製等。1年もたたぬ間に数多くの取組みを行い、現在は会員110人と5倍にもなっています。さまざまな取組みに積極的に関わってくれる若者の意識の高さには、頭が下がる思いです。

しかし、活動当初は自治体との温度差にかなり戸惑いました。が、地道な取り組みが次第に地元自治体にも浸透し、ついに市所有のディーゼル車に「大島大好き」が精製したBDPが使用されることも決定しました。ようやく私たちの活動が理解された、ということが実感できた出来事でした。

今年5月にも菜の花は見事な花を咲かせてくれました。かつて雑草だらけだった県道の花壇は鮮やかな黄色に彩られ、島を訪れる観光客、そして島民の心も癒してくれました。また、「菜の花プロジェクト」の取り組みは気仙沼市内のみならず、県内でも注目され、多くのマスコミで紹介されるようになりました。大島の自然を守っていくという意識は、今や島の人々にも広まっています。今後は活動を通して、大島を菜の花でいっぱいにし、同時に環境活動と体験学習をリンクさせて環境学習のフィールドとして更なる交流人口の拡大を目指して、もっと、もっと「元氣のある大島」にしたいと考えています。



## グリーン・ツーリズムを通じた「都市」と「農家」の交流

加美町グリーン・ツーリズム推進会議 後藤 新平氏

加美町グリーン・ツーリズム推進会議の始まりは、平成15年4月の合併以前、平成8年の小野田町グリーン・ツーリズム推進会議発足に遡ります。小野田町は宮城県北部に位置し、豊かな自然を有する栗葉山を町のシンボルとする、米・畜産の農山村でしたが、人口の過疎化に歯止めがかからず、町はその対策に苦慮していました。そんな時、当時の町長が100万人交流の町づくり政策を考えたのがきっかけでした。町が交流に必要な施設を作り、民がそれらを活用した100万人交流の町づくりを考える、その流れの中で、現在のグリーン・ツーリズム推進会議の前身となるアメニティ推進協議会が立ち上がったのです。

推進会議の主な活動のひとつが仙台近郊の中学生の「体験受入事業」です。元々は旅行会社からの持ち込みで始まり、1軒の農家に4人程度の生徒が泊まり、そのままその農家で農業も生活も体験するという農家民泊がメインでしたが、当初は受け入れてくれる農家も少なく、1軒1軒直接交渉して受け入れてもらったものでした。その受入農家登録数も現在では約40軒、受入農家同士のつながりも強くなってきています。また、中学生の受入も平成14年度の開始から、延べ14校、70人となりました。

「体験受入事業」は、中学生にとっては「地域に根ざした人々の営みを体験することで自分たちの地域を見つめなおし、生きることに、生活することに考える機会にする」、一方受入農家にとっても、「都市の子供たちと接することによって自分たちの地域の良さを再発見し、地域の活性化に結びつける」という直接的な効果がありました。そしてさらに農家と子供たち、地域と地域の交流という波及効果も得られました。現在の仙台・松陵地域、中山地域との交流は、正に体験受入事業の成果であり、同時に農家の中にも、事業を通じて都市の生活や人たちと向き合い、そして地域の活性化につなげていくという意識が高まりつつあります。

約10年前、加美は過疎化に悩んだ地域でした。しかし、今では年間60万人、加美全体でも80万人を超す観光客入込み数があり、経済効果も実証されています。しかし一方、推進会議の組織運営は町の補助金と人的協力によってまかなわれており、ひとり立ちできる見通しはかなり遠いのが現状です。事業内容も営利事業ではなくボランティアの色合いが濃いことも原因といえます。今後は、地域全体が「新たな農業を創造する地域」として立ち上がり、体験民宿の増加や都市農村交流の機会創出など新たなビジネス産業の展開につなげていきたいと考えています。

